

民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題

第 119 卷



南瀛佛教會會報

中國書店

NAN EIBUKKYO

XV 2

南
瀛
佛
教

號 月 二

行 發 會 教 佛 瀛 南 ^d 大 _北 江

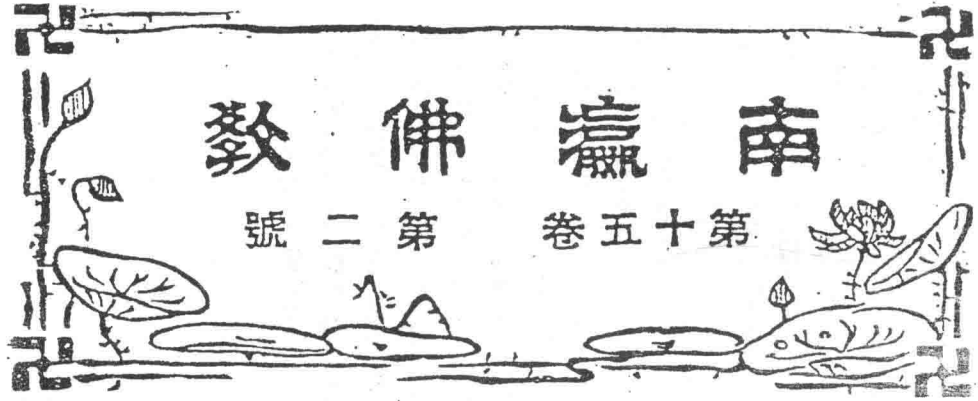


次 目

▲卷 頭 言	秦 昭	一
▲國 體 と 佛 教	西 阿 英	二
▲涅槃會と遺教經會	江 木 生	一〇
▲内地佛教の臺灣傳來	濱 川 乙 雄	二五
▲教團反省の時機	會 景 來	二
▲近代日本高僧略傳	來 馬 琢 道	三七
▲坐禪は佛教實踐の道	加 藤 咄 堂	三〇
▲佛教と教化運動	矢 吹 慶 輝	三三
▲宗教的情操の確立	河 野 省 三	三三
▲堅實なる生活	山 川 恒 一	三六
▲青年の使命	小 澤 元 道	三七
▲藝術教育の重要性	三 輪 田 元 道	三七
▲形式より内容	高 執 德	四〇
▲僧伽的意義	陳 常 諦	四〇
▲起信論白話註解	劉 金 標	四四
▲佛教如是我信	賀 月 圓	四六
▲佛教徒之責任	劉 朝 宗	四七
▲入學四書文	曾 永 成	五〇
▲臺灣佛教振興策	張 長 川	五三
▲天主佛教論		
▲日本高僧詩集		
▲南 瀛 詩 壇		
▲會員證書交付番號表		
▲會費領收並會員紹介		
▲編輯後記		

南 瀛 佛 教

第 二 號 第 五 十 卷



人生と宗教とは不離の關係に在り、而して宗教現象は古くして而も常に新しい、古來幾多の宗教が隆替興亡したのであるが、近代に於ても多數の宗教が擡頭してゐる。それらを總括して所謂「新興宗教」と稱せられてゐる。

最近百年以來我が國に於て興起した宗教は五百以上に及んでゐるが就中「天理教」、「金光教」、「ひとのみち教團」、「大本教」等は其の代表的ものである。それらは何れも、何らかの意味で、天啓、啓示を有ち、世を救ひ、人を救ふべき使命を自覺し、よし他を極端に排斥せぬまでも、常に自己を以て最高のもの、最後のもの、或は眞に人世を救済し得る唯一のものであると自認して夫々自己の使命の爲めに活動してゐるが、中には疑似宗教又はインチキ宗教、邪教として世の擯斥、政府の彈壓又は解散處分を受けたものもある。

思ふに新興宗教の興起は既成宗教に對抗し、其の虚に乘じて頭角を現はしたものであらうが、一面時勢の反影として興つたものである様にも觀察され得るのである。それは何れも現實的な樂天主義的傾向の濃厚であることである。或は疾病の回復と云ひ、或は災厄の離脱と云ひ、子孫繁榮、家門繁昌と云ひ、神と共に、よき世界を作り幸福なる人生を建設せんとする態度は其の特徴とも謂ふべきである。従つて死の彼岸に於て淨土又は天國を望むよりも、この地上に於てより幸福なる生活を求めんとする願望が特に熱烈であり、否、寧ろ之れを以て其の最高の目標とされて居る程である。

凡そ如何なる宗教に於ても、厚薄の差こそあれ、何らかの意味で「オカゲ」又は「御利益」を期待しないものはない。そしてそれが彼岸にあるよりも、目前に現はれた方がより效驗的である。然し乍ら新興宗教は更にその教義を堅固し深厚せしめてより高い「理想的」なものに致さざる以上、所謂現世利益黨主義の宗教は早かれ、遅かれ衰滅の道を辿らねばならぬ運命に陥るであらう。

國體と佛教

新年を迎ふる喜び

昭和十二年の新年を迎へ、洵に千里同風目出度き限りである。昔から一年の計は元旦にありと云ふから此目出度き新年に當つて我國民は今後如何なることを力むべきかと云ふ工夫を凝らさねばならぬ。納は世界の大勢等に就き話すことは不得手であるけれども一九三五年とか六年とかは何か我國に重大事件が起るやうに豫て云はれて居たが、幸ひにして昭和十一年即ち一九三六年は無事に過した。之は洵に有難いことである。それでも日本が世界の大國と交渉ある以上、國民は何れも眞面目に我國の前途を考へねばならぬ。失れに付けても納等が忽にす可らざるは國體觀念の明徴と云ふことである。今更國體觀念の説明をする必要は無いが考へれば考へる程我國け萬國に全く類無き特殊の國體を有つて居るのである。他の國々の歴史を見ると、何れも主權者が何年かで變つて居るが、我國に於ては何の幸ひぞ、天照皇大神から今上陛下に至るまで通綿たる皇統に依つて天皇の御位を續がせられ、途中屢々武臣等の爲に兩統交立と云ふやうなこともあつたか、其れでも根本に於ては間違つて居ない、日清戦争や、日露戦争の時に行はれた宣戰の詔勅を拜見しても「天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ヘ忠實勇武ナル

曹洞宗大本山
永平寺寶首

秦

慧

昭

汝有衆ニ示ス」と仰せられ、明治二十二年皇室典範を定め給うた詔に「天佑ヲ享有シタル我が日本帝國ノ寶祚ハ萬世一系歷代繼承シ、以テ朕ガ躬ニ至ル」と仰せられた。此様な勅語又は詔書を發布せらるゝ國は全く世界に類無きことである。外國の憲法論を其儘に説いて居る者の誤解から種々な意見を出すことは戒めねばならぬ。

伊藤博文公の憲法論を聞く

納は伊藤博文公が憲法に就て演説した筆記を讀んだことがある。其中に國の主權のことに就て精しく論じてあつた。畢竟一國の主權は君主にありとする者と人民にありとする者との兩説があり、歐羅巴に於ては二百年來君主と人民との關係に就き學者の唱道する所時に隨ひて同じからず、今猶區止する所無きの事實は之を歷史上に徴するも明かである。而して其移動する情勢を察すると、民主主義が徐々に人心に浸潤し、主權が人民にありと云ふ説が追々勢力を得て来るやうである。英國の刑法學者ステフenson氏は其著「刑法論」中嚴懲を論ずる條に於て君民の關係に二様の釋義を示して居る、之は王室を尊崇するのと否とは嚴懲に關係するからであらう。又君主と人民との關係に就ても二様の釋義がある、一は君主を見るに古來の解釋を取る者、又他の一は君主を見るに近世の解釋を取る者との二

つである。第一の解義は君主は人民の主宰なりと云ふものであり、第二の解義は二百年來歐洲に於て變遷したもので、彼のルーソー説の如きは大に民主主義に與つて力あるものと云ふべきである。さて之に對して伊藤公は「予は「君主は生れながらにして聖賢の君なり」とせざれば決して君主主義の成立せざることを云はんとす」と云ひ、更に進んで「君主國に於ての主權は實に君主の一身に附著するものである。我輩は不十分ながら主權を一國統治の大權と譯する、蓋し君主國に於ける一國統治の大權は君主の身體に密附するもので、獨り君主のみ之を有す、故に君主は國家に於て一人の君上なり、即ち君主は一國邦家の上に君臨するものにして君主を除く外を臣民と云ふなり」と述べ、「假令學者の説は何處に在るも、日本の國體、日本の歴史は如何と云ふを以て基軸とせねばならぬ。彼のステューア氏の謂ゆる古來の解義は當を得たものと信ずる。即ち一國の統治權は君主に屬し他人得て之を侵犯すべからず。仰いで之を尊崇する」と云ふ意味で述べて居られる。近頃の問題は納は知らぬ、此の伊藤博文公の演説で、議會が出来た後でも日本の國體は毅然として確立致して居るものと信ずる。

支那人の國家に對する考へ

それについて有難い話がある。滿洲の劉雨田と云ふ人に關する話が『大亞細亞』と云ふ雜誌に出て居る。劉氏は日清戰爭の時に遼東半島に於て自分ばかりでなく、一村擧つて日本軍の爲に大に働いて呉れた。之は日本から見れば功勞者であるが、支那から見れば叛逆者である。それで戦後遼東還附となつたので、日本に歸化した。ところが日本の若い人達が擧げて往つた。貴族院は戰爭中日本軍に利益を與へ、戦後日本に歸化するとは大義名分上甚だ不都合ではないか」と責めた。處が劉氏が威風凛凜になつて「私は清朝に仕へた者ではない、村民の利益幸福の爲を考へて働いたのです、之は公共の爲に盡すので、決して大義名分に反することはない」と答へた。話は其まゝで別れたが、劉氏がズット後に宮島と云ふ支那通の人に向つて「私は多年日本に住み日本人々と交際して漸く日本人の氣持が解つた。支那では朝廷に仕へなければ臣ではない君民は全然別なものだ、然るに日本人は朝に在ると野に在るとを問はず、總てが臣である。今にして日本の統一力強く從つて國力の強いことも理解し得た」といたく感心して話したさうである。全く劉氏の觀察した通り、支那の帝政時代には臣と民とがあつたが、日本には臣のみありて民は無い。現在の歐米諸國には民ありて臣は無い。日本の外交文書に於ては大英國臣民と書いてあるけれども、本國に於てはさうは思つては居ないやうである。北米合衆國の如きは、人民であつて臣下で無いことを誇りとして居る。歐洲の君主國でも社會的に稍臣下的の名残はあるが、國家主權說即ち君主機關說が一般に信ぜられて居るから、民ありて臣は無い。我國内にありても、特に天皇に對する時は臣と云ひ國家に對する時は民と云ふことになつては居るが天皇と國家とは一にして二では無いと云ふのであるから、國民を總て臣民と云ふことになつて居る。

國體觀念と三種の神器

北畠親房の「神皇正統記」は我が國體を明かにすべき國史の成績を示し、神器の由來を説いて皇統の正閏を正したる好著と云はれて居る。其開卷第一に、「大日本は神國なり、天祖創めて茲を闡き、日

長く統を傳へたこと、我國のみ此事有り、異朝には此事無し、故に神國と云ふ」とある、誠に國體觀念を簡明に云ひ盡したものである。乃で、其觀念を確めるものは、三種の神器である。「神皇正統記」には「天下悉く平ぎにしかば大和國橿原に都を定めて宮造りす、その制度天上の儀の如し、天照大神より傳へ給へる三種の神器を大殿に安置し床を同じくし座す。皇宮、神宮一なりしかば國々の御調物をも齋戒に納めて官物、神物の差別なかりき」と記してある。然るに崇神天皇の朝に至り「漸く神威を恐れ給ひて即位六年神代の鏡造り石凝姥神の齋を召して鏡を摸し鑄せしめ、天目一箇神の齋をして劍を作らしむ。大和の宇陀郡にしてこの兩種を摸し改められき。之を護身の璽として同殿に安置す神代よりの寶鏡、及び靈劍をば皇女豐鍬入姫命に附けて大倭の笠縫の邑といふ所に神籬を建て崇め奉らる。これより神宮皇宮各別になれりき、その後大神の教ありて豐鍬入姫命神體を頂戴して所々を巡り給ひけり」其次に第十一代垂仁天皇の章に「この御時、皇女大倭姫命、豐鍬入姫に代りて天照大神を齋き奉る。神の教により國々を廻りて、二十六年十月甲子に伊勢國度會郡五十鈴の川上に宮所を占め、高天の原に千木高知り、下津磐根に大宮柱太廣敷立てゝ鎮まり座しぬ」とある。初は、父子のやうに考へて居られたが、後には何となく、畏多い事になつて遂に伊勢神宮に祀ることになつた。此の經路を考へると、今上陛下も曾て仰せになつた「養育君臣にして情は父子」と云ふ勅語も一層有難く拜する次第である。父子には相違ないが神と人である。君と臣と義は正さねばならぬが親子の情は變らない。之が國體の根本である。

國體と日本精神

國體の觀念を明かにし君民一致して國威を宣揚するのが、日本國民の務であり悦びである。此任務を盡すのが大和魂であり、近頃は之を日本精神と云うて居る。之に就いて、近頃、政治學や、倫理學の方から日本精神を検討して居る者があるが、納はまづ斯う考へて居る。

「國體に就て十分なる理解を有し、此國に生を享け居ることを誇りとし、正義に據りて我國家を愛護するを使命とする精神」語は難解しいが、然らば其國體とは何かと云ふと、

「天孫降臨に依つて確定された萬邦無比金甌無缺の皇室を日本國の大宗として奉戴し、天皇御統率の下に國を成すもの」と云うたら、略云ひ盡した事であらう。

日本精神と三種の神器

さて此の日本精神は何うして養はれたかと云ふに、之には種々の説がある。例へば、三種の神器が、天照皇大神の御精神を表して居ると云ふ者もある。即ち劍は武力を示し、玉は仁を示し、鏡は智を示すもので、之が大神の御教訓であると云ふ説である。此説は大部分普及して居るが、よく調べて見ると典故のある事では無い、いかにも大神の御精神は其處に在りと申上げるのは自由だが之を斷言するのは誠に畏多いことである。其他に、何か古代に教訓があつたかと云ふに「歷朝詔勅類」などにも見當らない。ツマリ上代に於ては心から心に傳へて來たと云ふ外は無いのである。

十七憲法と日本精神

推古天皇の御代に聖德太子が攝政として御定めになつた憲法は誠

に貴いものである。十七條あるから十七憲法と申して居る。

其第一に「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す」と佛教の和合の精神をお擧げになり、第二に「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸にして萬國の極宗なり。何れの世何れの人か是の法を貴ばざらん」と仰せられ、第三に於ては「君を則ち天とし、臣を則ち地とす」と仰せられ、第四に於ては「夫れ民を治むる事は要す禮に在り」と仰せられ、最後の第十七に於て「夫れ事は獨り斷ず可からず、必ず衆と共に論ふべし」と仰せになつて居る。憲法と申すから明治天皇御發布の憲法のやうなものかと思ふと、帝國憲法の外に教育勅語の御精神も入り、五ヶ條の御誓文の精神も加はり、其他我國國民精神の基礎と云つてもよいやうなことが皆お述べになつてある。而して其根本は佛教の御精神であり又儒教の精神も取入れてお在りになるやうである。即ち我國國民精神を陶冶するには佛教に依るべしと云ふ原則が此に見えるのである。此憲法に就ては寛教授が、之は大日本國最初の憲法である、未だ廢すると云ふ法律が出ないから、今も欽定憲法と並んで日本の國の法とすべき憲法なりと云はれたさうだが、如何にも有難い話である。

日本歴史と佛教

此の十七憲法を拜見して、其中に佛教を重んぜられた事が、徳川時代になつて、歴史家の非難的となつた、聖徳太子は學問もあり、識見もあり、眞に我國の地位を支那朝鮮等に對して高められたお方である。御幼年の時に御不幸に逢はれ、其御體験も加はつて、此の憲法を御制定になつたのであらう。然るに、徳川時代の儒者が、尊退之などの説を尙んで、佛法を誹謗し遂に太平様まで非難

するに至つたが、我國に於ては佛法と國體とは兩々相俟つて進んで來たのである。前に云つた「神皇正統記」にも、其初に「凡そ内典の說に須彌と云ふ山あり、此山を迴つて七つの金山あり」と云ひ、天竺を中心として支那を一邊の小國とし、日本は彼地を離れて海中に在りと説き、華嚴經に、東北の海中に山あり、金剛山とあるは、今の大倭の金剛山の事なりとぞ、されば此國は天竺よりも、震旦よりも東北の大海の中にある別州にして神明の皇統を傳へ給へる國なり」と述べ、佛説によつて我國の貴きことを教へて居る。ツマリ徳川氏の時代までは、佛法を以て國民精神指導の規準とし、十七憲法の御精神によつて國本を養うて來たのである。日本歴史を讀む者は、熟く此の佛法との關係を承知せねばならぬ。

佛教は何ぞ日本に教へたか

然らば、其憲法に於て信仰するやう訓諭された佛法は、何を我國民に教へたかと云ふと、納は各宗各々少異はあるが、先づ六つほどの特徴を擧げて見たい。第一に因縁觀を教へたことが大きな力であると思ふ。人間が此世に生れて來て世間の様子を見ると随分不満に思ふことが多い。生れながらにして富貴の家に居る人と、母の胎内に居る時から貧乏な家に生れることに定つてしまつた人と比べて見たら、誰も之は當然のことと諦められない。諦めてしまへばそれだけのものだが何故こんなに人間は不公平なものであらうと疑ひ始めた時に、世の中を呪ふ心が起り勝ちのものである。然るに佛教に於ては、因縁觀を教へるから、之は誰が爲す業でもない。父母の所爲でもない。全く因縁所生即ち因縁に依つて此世に生れて來たものであること云ふことを合點すれば、同じ貴賤の境遇にあつても、聊か慰む

る所があり、過去は過去として將來に向つて進む奮發心を起すことが出来る。此因縁の道理を教へなかつたら、社會は年中不平の聲で滿ちて居つたらう。之を緩和したものは佛教の教理である。第二には、因果の道理を教へ、現在の一生だけでは總ての物事が解るものでない。前世もあり、來世もある。眼に見えなくても因果の道理は昧す可らざることを教へた。さうなると現世ばかりを見て居た國民は現在の生活を以て前世の果報なりと考へ、大に反省すると同時に來世を一層良くする爲に良き生涯を送らねばならないと感ずるやうになつた。さうかと思ふと第三には四民平等の思想を養つた。因縁に依り因果の道理に従つて生を受けるものではあるが、決して不幸なる生活に甘じなければならぬ理由はない。物質的に貧しくても精神的に富むことも能る。俗界に於ては卑められて居ても、超越した世界に於ては尊い位に陞ることも能ると云ふことを教へた。四姓出家して同じく釋氏と稱す」と云ふお語などは、階級制度が嚴格で、武人の家は代々武人、賤民の家は代々賤民と云ふ印度の國風に向つて一大光明を放つたものである。此思想が日本に於ては随分不平を懷く者を救ふ力があつた。西行法師とか熊谷蓮生坊とか云ふ人が佛教に入つた爲に何れ程幸福を得たか、歴代の天皇、皇太子のやうな御方でも出家せられた爲に解き難き問題を緩和せられたことが多數あつたことは歴史上に明かである。佛教は通世を教へるのではないが、徒に不平を抱いて世の秩序を亂す思のある時、何の位人の心を和げる役に立つたか、數へ盡せない。歴代の人々は之に由つて精神上の問題を解決し來つたのである。第四には諸行無常の道理を教へた、現世に執著して欲を離るゝ事の出来ない者に一切の物事が永久

待むに足らざる事を教へた。それ故佛教は大膽寂しいものゝやうに思はれたが決してさうでは無い。何人も此道理を辨へて居れば、事に當つて間違つてく事は無い。第五にいざと云ふ時には十分の勇氣を揮ふことを教へた。戰場に臨む時に觀世音菩薩の尊像を護持佛として必勝を期し、禪師から法名を貰つて不惜身命の誓願を立てた武人は指折り數へ切れぬほどある。第六には法に依つて故人を追慕する事を教へた。之は來世の實際ある事を確實にするものである。死者あれば僧侶を招いて引導を乞ひ、年忌には必ず故舊を集めて供養を行ひ、家に慶事あれば墓所に參つて祖先と與に之を喜ぶ若し戰に勝つた時には怨親平等の大慈悲心によつて敵の死者までも追慕する。まだくいくらもあるが、之だけ數へて見ても、佛教は日本の精神的米の飯であり精神的鹽であつた事が分る。

日本佛教徒の崇拜

夫なら、日本の神には何う仕へたかと云ふと、佛教を信する者は皆神を崇めて居た、西行法師が伊勢神宮に參つて「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるゝ」と詠んだのは、皇祖に對する眞の感謝の念を現したもので、僧侶であらうが、無信仰の者であらうが、儒者であらうが、此心持は決して異はない。徳川時代に於て山崎闇斎が「若し孔子や孟子を總大將にして日本に攻め込んで來た時に日本の儒者は何うするか」と云ふ試問をした、此時弟子の中には答へに迷つた者もあつたやうだが、師匠は之に向つて明快なる解答を與へ、假令孔子や孟子が來ようとも直に矛を取つて之を討つすべしと云つた。こんなことは佛教に於ては四恩の中に國王の恩を教へて居るから、珍しいことではないが、儒教の全盛の時

代には斯様な詰らぬことまで問題にして居つたのである。佛教徒は其様な事は夙に解決して居た。傳教大師が鎮護國家と云ひ、崇西禪師が興禪護國と云ひ、我が御開山が先づ興聖寺に於て聖壽の萬歳を祝賀する祝國上堂を勤められたのは、此精神に基いたものである。佛法が全國に弘まり、神恩皇恩の悉さを教へたればこそ、數々國內全部が戦亂の巷となりたるに拘らず、神域は汚されず、佛國は保たれたと云つても過言では無からう。印度邊の佛教と回々教との争ひとは異ふ。

崇神奉佛の妙旨

何故に斯る美しい有様を歴史上に見る事が出来るかと云ふに、我國では、古來「神佛」と云ひ「カミホトケ」と云つて、二つを一つにして拜んでゐる。之が西洋人には解らぬと云つて、時々國體に關する問題を起すが、我國では何の不思議もなく通つて居る。尤も此の「神」と云ふ語の中には、二三の種類はある。即ち神武天皇以前の歴代の神と神武天皇以後の天子及び皇族と、諸般の業を分擔する神と、多少意義が異つて居る。今上陛下を現神と申上げるのは、今説明するまでも無い。其の事について柄の實驗した所を述べると柄も度々宮中の賢所に参拜致した。曾洞宗管長は元旦には宮中に於て宮中席大令による拜賀を致さねばならぬから前以て身心を清め、祝聖を勤め、二重橋から参入して親しく天顏を拜するのである。それから一月三日には正式に宮中に参入して賢所拜禮を致すのである。其賢所は宮中三段の中央に位し天照皇大神の御靈代としての神鏡を奉祀してゐる。賢所の向つて右が神殿で、左が皇靈殿である。神殿には八百萬の神を祭り、皇靈殿には神武天皇以下の天子及び皇族の尊靈を

祭つてある。同じく神と申上げるが、別々に祀つてある所を見ると、何の神も同じ待遇を申上げて居るとは申されないやうである。孰れにしても神と云へば、氏神は申すまでも無く、我國の祖先及功勞者と心得れば可い。それから佛と云へば、釋迦牟尼佛を中心として、諸佛諸菩薩を總稱したものであるが各自信する本尊の事を第一とし、自然其他の佛菩薩を拜むのである。仍て神佛と云ふ語の中には、日本人が目に見えぬ尊きものを總稱すと云つても宜いであらう。

佛教信者の任務

我國の佛教信者は日本は神國と確信し佛教徒が佛様の前に行つて禮拜する時にも、何うか我國が榮えるやうにと願ふ。我國の榮えたと云ふことは天照皇大神の恩召に依つて盛められたる我日本國が永久に國體を傷めることなく、天孫の御血統に依つて見事なる治績を擧げらるゝやうにと念願することである。而して自分の祖先の信仰を考へ、我心の中に全く清淨なる佛教の信念を有ち、身を修め徳性を養ひ、貴賤貧富共に佛の精神に依つて働いて行かりと心掛けるのである。否唯心掛けただけではいけない。飽くまで此精神で實行するのである。崇德天皇が「法華經藥草喻品」の心を「さまざまに千々の草木のほどはあれど、一つ雨にぞ芽ぐみそめぬる」とお詠みになつた御精神を考へて、佛教の恵みの雨に濡れる者は、其盛大君の稜威の下に忠良なる臣民として芽みそめる事に致したい。即ち國體觀念の明徴の爲に働くのは我佛教徒の務である。

神を敬し佛に歸依せよ

然らば何れが甲か乙かと云ふ事になると、神は何となく威嚴のあ

と方で、其前に出る時には、先づ精進潔斎して只恐縮して頭もたすに居る心地である。之は誠に結構であるが、人民が神の前に文縮み上つただけでは眞の活動は能ない。眞の道徳は行へない。神の祭式に参列して感ずることは、何事をおいても膝を弱さないやうにしる、無作法なことをしないやうにしる、若し其の様なことをすると神罰が立所に至ると云ふ戒めを受け殷肅になつてしまふ。何うも儀式としてはそれでよいけれども、何の爲に瞻拜するのか判然解らない中に式が終ると、それでヤレ／＼安心したと云ふ心持である。夫の祭禮に神興を擔ぐ人々が僅くのは神興だから挨拶くので、セメテもの安全齋である。

其處になると佛教の方では佛様に供物を供へ、茶菓を供へて諸般の殷肅なる儀式を行ふが、参拜して居る信者は自分のお母さんと話をするやうな心持で居る。式が終つてから説教師から色々佛様のお話を聞いたり又は因縁に就ての話を聞かして貰つたりして、時には軟い歌も入り、譬喩も入つて和かに法要を了り、お喜参をして歸る。四月八日の灌佛會、七月十五日の盂蘭盆會、春秋の彼岸會何れも宮中に於て儀式が行はれたが、何となく氣分の和い年中行事で、此間に佛教が慰安を與へた特色を見るやうである。若し神を秋の霜に例へれば、佛は春の霞の如くである。神を嚴父とすれば、佛は慈母の如しと思つて居た。之が神を敬し佛に瞻依する日本人の特色と云ふべきである。

承陽大師の國家觀

擬て思ひ出さるゝことは、我御開山承陽大師様のお語である。國家に眞實の佛法弘通すれば諸天暇無く衛護するがゆゑに王化太平な

、聖化太平なれば佛法其力を得るなり」と仰せになつてゐる。眞の佛法が國家に弘通する時に於ては諸佛諸天神も少しの間隙も、衛護して下さることであるから、天皇に對する臣民の心が一致するので、政治其他に於て毫も亂るゝことなく、全然太平に治まつて行く。既に天皇の稜威に依つて民衆が化導せらるれば、即ち民衆一般の心が皆太平であり、佛法の方でも亦其力を得るなりで、十分に今後の日本を背負つて起つべき人物を養成することが能きよう。

親覺上人は「朝家の御爲、國民の爲め念佛申合せ玉ひ候には目出度う候」と云はれた。衲等は本堂に今上天皇聖壽萬安の今上牌を安置し毎朝皇圖鞏固、國土昇平を祈願致して居ることであるから、佛教徒は皆國體觀念の明徴に力めて居る。佛と神とは相對峙するものでなく、極めて密接の關係あるものであるから寺院に於て佛法の式を以て供養申上げても決してお受けにならないものではない。奈良朝は勿論、其以後の天子は孝明天皇に至るまで盡く佛教に依つて安心を得られ、佛教に依つて禪儀を行はれたお方である、即ち佛法と皇室とは離るべからざる關係があるのだから、佛教徒が其天子の思召に隨つて法樂を擧ぐる事は必ず御喜び下さる事であらう。昭和五年に我が永平寺に於て大正天皇様の御回向を申上げ、以て東宮當時に行啓遊ばされたる聖恩に報い上りたる處、忝くも皇太后陛下より御供物恩賜の榮典に浴したる如きは、誠に有難き實例である。何卒佛法を以て王法を翼け、王法によつて佛法を盛にし、以て國運の發展を期したきものである。後宇多天皇が二十五條道詔の第三に、吾寺興復せば皇業安泰ならん。努力努力、我意に背いて悔ること莫れ」と仰せられた御精神は國民一般今も忘れてはならぬ。

三十不屈不撓の勇氣を發揮し、其の功績を

今の世界はいさゝかに動搖してゐる。いくら正しい事を云つて居ても、之を實行するに力が要る。エチオピアは何か恃む所があつたのかも知れないが、其結果は彼の通りである。日本は神國である。神は正義を慕ひ玉ふと云つたからとて、其神力を恃み正義を待んで自分の力を養ふことを怠つてはならぬ。何を措いても、國民が常に其本分を辨へ、進むべき道に進むべきである。清き神を崇め、正しき佛教を信じ、屈せず、撓まず、朝家の御爲國民の爲に進む現代人は、必ず我が宗徒の中から出るべきである。

道俗の健闘を望む

納は、本年は全國を東西に分つた西部の方を巡化する番に當つて居るので、二月下旬より次から次へと請待を受け、六月下旬まで一日も隙が無いやうに日程が出来て居る。納も到る處で今申したやうな國體に關する話を致す積りであるが、仲々一人や二人の口で此大きな問題を長く解らせるやうにすることは出来無い。何卒志ある人が如何なる場合にも此道理を長く説明して小學校の兒童にも解らせ、昔から漢學者に陶冶されて佛法などは我國に無用のものであると云ふやうな議論をした人にも説明し、殊に外來の思想は我國には絶対に不必要であると云ふ偏頗な議論をして居る人々にも十分解るやうに説明して貰ひたい。佛様は不慳法財成と云つて法を惜むことを戒めになつて居る。自分が善いと思つたことは或るべく廣く傳へるのが社會の爲になるのである。自分が行へばよいと云ふのは薩長生であつて、國民と共に此大事業を遂行する決心を爲すのが薩長の行願であり又大乘佛教の特色である。至親不盡。

月々のいましめ

六十一年前を懷ふ

昭和十二年は丁丑の歳であるから、十千十二支が揃つた昔を顧みると、明治十年となる。言換れば明治十年は今より滿六十年前である。即ち明治十年生れの人は今年還暦となつたのであるから、其時に生れた人は皆西南戰爭の起つたことゝ、明治元年よりここに至るまでの變化を追想して今更國運發展の跡の大なるを思ひ、此間に生を享けた事を喜ぶべきである。夫の一戦には國家の爲に身を賭けて論争した國士の姿がありありと見える。義勇奉公の一念が凝つて相争ひながら、事終れば直に國家に忠誠を盡す我國民の美徳は誠に禪者の理想を實現したものと云へる。特に、國際關係に就ては深く鑑むべきである。

道ある者は強し

遠く海を距てた國に起つた事を我國民の間に一大警鐘の亂打と譬く、古は徳と位と相並んで始めて長者と云はれ、居士と云はれたものであるが、時としては徳を忘れて了ふ事もあつた。然るに、今や如何に物質萬能の氣運が盛でも福徳圓滿なる者のみが眞に世の尊敬を受ける事を實證せらるゝに至つた。我等は日本帝國の臣民として我國體の精華を世界に誇り得る事を喜ぶ者である。法陽大師言く、天は道有つて以て高清、地は道あつて以て厚寧、人は道有つて以て安穩なり、乃至天上天下當處永平と、天も地も人も、道を離れては安定を保ち難き事を示されたのである。新年初頭先づ道を以て人生を幸福にする事を誓はうではないか。



涅槃會と遺教經會

西岡英夫

(上)

春とは名のみ、梅は咲いても雪が降る、寒い二月の十五日には、各寺院では涅槃會の法事が修せられる。即ち春尚浅い二月十五日、各寺では涅槃像を掲げ、遺教經を誦して涅槃會を営むとあり、我日本では、壽廣和尚が、山階等で營んだと云ふ記事が、古い物語の今昔物語に出て居るから、餘程古くから寺院で行はれたものと思はれる。今日では陰曆の二月十五日に修する寺もあり、妙心寺は二月に、東福寺や泉涌寺等では三月、大雲院で四月にと云つた工合に、寺院に依つて修する日は異なるが、二月十五日は釋尊の釋迦如來が入寂された日だが、二月十五日にこの法會が営はれる寺が多く、恙うした法會を涅槃會、法會を修する寺を涅槃寺とも云ふ。この日を涅槃日とも涅槃忌とも云ふが、釋迦入滅の日だから、佛の別れ去りし佛とも稱へ、二月十五日だから二月の別れとも云ふ。涅槃會に掲げる涅槃圖や涅槃繪は釋尊寂滅の姿を、描き、それを取り巻き圍む、五十二類・天道・阿修羅・餓鬼・畜生・六畜、洪河(恒河)とも記す(の鱗

魚、總て天地間に生を受けたものの悉皆が愁嘆して居る情景を描いたもので、涅槃像は釋尊寂滅の姿を作つた木像石像、その他であるから、涅槃圖とも云ふ。この涅槃像の圖は、印度支那日本の各寺に何れも見られるべきものが多いが、日本の寺院に藏する涅槃圖で、最も美しく見事なものは、東福寺の明兆畫、同じく三聖寺吳道子畫、高藏寺顏輝畫、大徳寺松受畫、妙覺寺古法眼元信畫、本法寺長谷川等伯畫淨土宗報恩寺顏輝畫が有名である。それで毎年よく涅槃會の時には雪が多く降ると昔の人は云ひ、雪の終りは涅槃會と謂はれたものである。大阪の四天主寺では、この涅槃會を常樂會と云つて居る。それで二月十五日に涅槃會或は涅槃忌と稱へ、各譯刹即ち各譯宗の寺院では、涅槃像を掲げて各法事を修するが、一般民衆信徒等は、舊體造つた餅花を再び煎つて佛に供へ、五月の餅を穀の如く切り煎つたのを佛前に献し、蓮を入れて甘と云ふけんこを製して供へるが、恙うした餅花を煎いて用ゆるので誤つて釋迦の鼻糞と云はれるが、實は花屑と云ふところであらう。

古文書に山之井と云ふのには、釋尊跋提河の邊にて新蓋を給ひし

日なれば、あるとあらゆる寺々に、涅槃の繪像を掛けて、宗々の行ひ待る、是をながすなみだやばだい川とも、鼻たれて鳴くやねはん象とも云へり、すべてこの經のていなどあるべしとあつて、新盡きは佛滅を新盡きて火消ゆるに譬だのである。同じ古い書物目次記事には、涅槃像の解説の次に、大雲院焼畧釋迦堂や梅尾、南都奈良の興福寺、奈良二月堂、大阪四天王寺京の泉涌寺の七項目を設けて、それ〴〵涅槃法事を説述して居る(略)涅槃會の解釋として、凡そ佛滅日、佛誕日、佛成道日の三佛日と達磨忌の二祖忌諸禪刹悉これ修すとあり、洛の京都内外の諸寺院は、涅槃像を掛け各々法事を修す、民間には舊臘造る所の餅花を再び熬りて佛に供す、俗誤りて釋迦の鼻泉と謂ふ、實は花泉なりと云ふとある。又た滑稽雜談と云ふ事には、垢芥抄に曰く、二月十五日、南都興福寺の常樂會云々、常樂會も涅槃會に同じ、涅槃とは寂滅なり、天竺にては佛になるを涅槃と云ふ、それを唐土の言葉に翻譯して寂滅と云ふ、寂とは圓寂の義、滅とは滅度の義なり、は一切の煩惱を滅し盡して、諸業まどかに止まるを圓寂とも寂淨とも云ふ、是不生滅の悟りなるゆゑ滅度と云ふ、然れば寂滅とも涅槃とも同意なり、今日を佛滅日とも云ふ四月八日佛誕日、臘月八日佛成道日、これを三佛日又は三佛期とも云ふなり、諸宗每寺院涅槃の法會を修す、攝州四天王寺に於ても常樂會と云ふ。年浪草と云ふ書の世説問答に云ふ、釋迦如来下天のはじめをたづねれば、淨飯王の後に降誕して、七日にこの母麻耶夫人を給へり、十九にして出家、三十にして成道し給ひ、十八年母の恩を報せんことを思ひて、一夏九旬に法を説き、修に聲聞の間にして涅槃に入り給ひし佛のありさまを繪像に寫し、二月十三日に

入滅し給へば、今日掛くるなり云々とある。

涅槃會の由來の概略は既に記述したが、涅槃と云ふのは、梵語ネハン(Nirvāṇa)で涅槃と漢字を當てるが、この音譯の涅槃の義は、滅、不生、安樂、解脫等と譯し、二月十五日が恰も佛陀釋迦牟尼世尊の入滅の日なので、この日を涅槃會とか涅槃忌とか、常樂會とか佛家では稱へ、自園子茶菓を供へて、盛大な法會が修せられる。而して釋尊が涅槃に入られた、即ち入寂された光景を略述すると、世尊四十五年の化導、能事已に畢つて齡漸く八十を過ぎなので、世尊の足は何時となく北方に向ひ、雪山下の御國に歸臥せられんとして、恒河を渡り、ガンヂス川の東岸から吠舍離城に入城、小高き丘に登り、大象が四方を睥睨するやうに都城を望まれ、あゝこれが吠舍離城での最後の眺望だ、これから後三月如来は方に涅槃に入るのだと、死の豫言をされた、それから後、此處を去つて聲陀の村に遊化され、更に北波婆城に御到着なされたが、この地に治土の淳陀なるものがあり、世尊の御遊化と承り、大喜悅、自ら親しく世尊に謁して、明日の齋供を受けられんことを切に懇願すると、世尊はそれを快く諾され、翌日約束された如く淳陀の家を訪れられた、淳陀は世尊一行のために特別に誠心を隨めて齋供を設け時を報じた、この特別の齋供はスーカラマツダバム(Sukara-maddava)と云ふもので、スーカラは野猪、マツダバムは珍味で、野猪の珍味の意義であるが、これを佛音三藏の註釋に従ふと、野猪の乾肉と解するやうになつた、乾肉としたのは語源から來るものと信じた故であらうか、巴利語マツダバムは梵語(Maddava)であつて、珍味の義、野猪の珍味とは、野猪より料理したる珍味と名くる菌子である、だがら巴

阿羅漢經に最も近似する遊行經には、煮梅樹耳、世所珍奇と云て居る、梅樹の耳とは、多分梅樹樹に生ずる菌子を指したものであらう、それを野猪が好んで食するので、この名を得たものと想はれる。

これは兎に角として、世尊は淳陀の誠心誠意を擧げてこの珍珠を、殊の外に喜ばれて、この日は至極上々の御機嫌で歸へられたが、その翌日急に身體の工合が悪く、醫師に診察させると、重病との事に一行の人々は大に驚き、世尊は淳陀の珍珠を食されて、病を癒られたと、淳陀を切に叱責すると、世尊は「いや然うでない、人の誠心誠意を擧げたもの、何で然う云ふことがあらう」と云はれ、淳陀の厚き情けを嘉せられた、それから病重くなる一方終焉も近いと知られてか、波婆城を發し逆行して俱尸那迦羅城にお還りになった。而して城外を流るゝ迦屈陵川の堤で衣を四つに疊み、これを敷かれて其處へ休息されたが、この時渴を覺えられた世尊は、阿難に命じて水をくませられたが、この時偶五百の車馬が川を渡り流れが濁つて居たので、命ぜられた阿難は、これを酌み參らすに大に躊躇して居ると、世尊は渴に耐へかねられてか、命ぜられること再三再四、已むも得ず阿難は、河に下り濁れる水を酌むと不思議、濁つた水をくんだのに、酌んだ水は清らに澄みて飲むに適して居たので、大によろこび早速世尊に擧げて渴を醫せられた、これこそ實に世尊のために汲んだ、所謂末期の水であつたのである。

阿難が擧げた水に、世尊は氣力を出され、阿難その他一行を督して、尼連禪河を渡り、俱尸那迦羅城の沙羅林に至られた時、世尊は勞舌を甚しく覺えられたので、阿難に命じて雙樹の間に臥床を伸べさ

せ、頭を北迦西に右脇にして、足を足の上に重ねて安臥せられた。この時、世尊は終つたので、世尊は最後に參來した須跋の善賢弟子をも得度させられ、比丘等よ、我今汝等に告ぐ、諸行は無常なり、努力に依つて大成せよ、これ如來最終の訓言なり」と宣はれ、御齡八十一歳に達せられた老體世尊は、いよいよ化縁既に盡きて、安祥として眠るが如く涅槃に入り給ふた。即ち入寂され、これが實に西曆紀元前四百八十六年二月十五日で、皇紀九十四年に當る。世尊が涅槃に入られると、日月は地に墜ち、世界は再び盲闇の昔に陥りしかを感じせしめ、人天號泣し、道弟居措を失ふ、沙羅雙樹は時ならぬのに白い花が開いて、悲風遍く四邊に薫じたと古くから云ひ傳へてある。かくて俱尸那迦羅城の末羅族は、世尊の遺骸を城內靈廟天冠寺に運び、此處に香椽を設けて供養し、七日にして迦氣漸く參會、闍維送終の式を終へた。

その後、麻伽陀國王舍城の阿闍世王、吠舍離國の梨奈毘族、迦毘羅城の彌迦族、阿羅剌波國淨利族、羅曆城の拘利族、毘哆提波國婆羅門、波婆城の末羅族、俱尸那迦羅城の末羅族の八使節は、各殊故を具して舍利の遺骨を分配されんことを請ひ、香姓婆羅門は舍利を等分して遺徳なきやう取り計つたので、分配された舍利は、各自がこれを得てそれ／＼供養した、畢波利婆那國の孔雀族は、後れて到來したので、漸く炭盛を得て供養したと傳へられて居る、かくて大聖世尊の入寂を記念すべき舍利塔は、十基を算するに至つたのである。僅にして一王國の儲君と生まれ、夙に人生の秘契に心を潛め、二十九歳世累を絶ち出家し沙門の身となり、勤苦修行六年、三十五歳菩提樹下に正覺を感じ、一切の群生を濟度せんとの大慈悲心を起

し、初め鹿野苑に法輪を轉じて以來、最後善見比丘を得度するまで、悠々五十餘年、各所に妙法を宣説して救世の大事業を畢へ、狗戸那城阿利羅跋提河の邊、沙羅雙樹の間に、八十一歳を一期として、大般涅槃に入つた佛陀世尊の一生は、恰も東天紅々と登つた太陽が、融々たる長い其の一日を照らし、梵雲變雜裡に徐ろに雨天に没せんとする、長閑な光景に彷彿たるものがあるではないか、實に崇高偉大な世尊の生涯であると稱して可い、従つて三佛日の一つとして、涅槃日の法會は、佛徒として世尊を偲び奉る尊い日で、涅槃會も亦た意義極めて深い法會であると云つて可い。

(下)

大聖世尊の入寂を偲び、救世濟度の大慈悲を感謝して、冥福を祈る涅槃會の法事に掛ける涅槃繪は、釋尊の涅槃の光景を描いた繪であつて、各寺院にはこれを藏して居るが日本に於ける涅槃繪として有名なものは、二三にして下らないが、古く立派で美しいと云はれ、天下一品の評が高いのは、京都東福寺にある兆殷司と云ふ畫匠の筆に成つたもので、縱八間横四間と云ふ素晴らしい大きなもので、頗る雄大な作品と稱せられて居る。而して涅槃繪の最大なのは、京都泉涌寺の所藏のものださうな、全部が木像で表現したのは四國の某寺に在るとか云はれて居る。東福寺は三月十五日に涅槃會が、昔から修せられて居る故、この有名な涅槃繪も、三月の十四十五十六日の三日間、一般に拜觀が許されて居るこの東福寺の涅槃繪は、應永十五年六月今から、前、兆殷司が齡六十七歳の時の作たと傳へられて居る。ところで面白いのは、この涅槃繪には猫が居るのでも有名で、普通の涅槃繪には猫が居ない。釋尊入寂の日、天から藥袋が

下つて沙羅の枝に懸つた、然るにその枝が高かつたので、誰何人も取りに上り得る者が容易に出なかつた、その時一匹の鼠が、その藥袋の紐を噛み切るべく幹を上ると、樹下に居た猫が、鼠に飛びつき喰ひ殺してしまつたので、藥袋が取れず世尊は入滅された、怎うした傳説か碑か知らぬが、この故に猫は涅槃繪の中に入れられず除けられた、それで兆殷司も猫を同様に描かず、せつせと涅槃繪の完成に精進したが、或一色が不足したので頓と當惑したが、その祈り日毎兆殷司が描際には、その側を離れず、一匹の猫が一生懸命に筆の運びを見て居る、それが毎日なので兆殷司も不思議に思つて居た、それで一色の不足に當惑した兆殷司は、戯に猫に「おい／＼お前も、この難有い圖の中に入れて欲しいかい、欲しいならこの不足の色の繪具を探して來てお呉れ」と云ふとこれも不思議、件の猫は何處で探し如何して見つけたのか望みの不足の色の繪具を啣へて來たので、兆殷司は驚き喜び「おう持つて來て呉れたの、いや難有いこれで繪が立派に出來上る、難有い嬉しいぞ」と云つて、その繪具を筆に染め、然らば約束だつたな、猫も畫から、お前の姿を畫かし」と云つて、猫を畫き加へ漸く繪が完成したが、それ以來この猫は影も姿も見せなかつたと云ひ傳へられ、かくて東福寺の涅槃圖には、他と異り猫が入れてある。

泉涌寺のは最大なものとか云はれ、女堂にさへ掲げることが困難なもの、それで仕方がなく、半分折つて掲げ拜觀せしめて居ると云ふ、世にも珍しいものである。

涅槃會として大雲院では、特別の行事があつてこれも有名である。四月十五日に法會を修するから、同日午後二時頃から、惠心僧